巻頭エッセイ

愛をこめた軍事郵便と受けとる兵士の心情
――書き手と読み手の心の振幅と意識の変化――

新井　勝紘

戦地と銃後の双方からの手紙

軍事郵便というと、戦場の兵士から銃後にいる家族などに宛てた一方通行の手紙が、まず思い起されるが、軍事郵便は戦場と銃後を交互に行き来した手紙であることは言うまでもない。日中戦争からアジア・太平洋戦争にいたる時期には、学徒まで含めて多くの兵士が動員され、正確な数は明確になっていないが、日露戦争期と同様に４億ともいえる数の手紙が、やりとりされた。残された軍事郵便から、何を読み解くことが出来るかと問題をたてた時、兵士の手紙はもちろんのこと、兵士が戦地で受け取った手紙も同等にみないと、一面的な把握になってしまうだろう。

現在、私たちが手に取って確認できる軍事郵便は、ほとんどが戦地から銃後に宛てた兵士の手紙である。それも、億の単位の軍事郵便のうちの、数十万通にとどまるだろう。軍事郵便に特化して収集、整理、保存し、さらに公開する公的な専門施設が日本にはほとんどない現状のなか、軍事郵便研究はすすめなければならないが、戦争終結からの経過年数で、画期となる周年を機に、個人的な努力によって埋もれていた肉親の軍事郵便が復刻、翻刻され、多くの人の目に触れることができるようになってきた。兵士の妻や子どもたちの努力によって翻刻され、はじめてその内容を知ることができるようになった。戦後50年となった1995年が一つの大きな画期だった。あと２年で戦後80年を迎えるが、軍事郵便への注目は弱まりはすれ、高まることはあまり期待できないだろう。ただ、現状では、軍事郵便の発掘はまだまだ中途半端で、家の片隅に眠ったままになっている場合が多い。兵士の手紙とともに、兵士が戦地で受け取った手紙も含めて、これからもあきらめないで発掘する努力が必要だと私は思っている。

私の手元に、自費出版のような形で全くの個人で刊行したものや、あるいは地域の小さな出版社から出した軍事郵便そのものを復刻公開した数十冊の本があるが、その多くは戦地の兵士が銃後の家族や友人、恋人、恩師などに宛てたものである。戦地の兵士が銃後からもらった軍事郵便を翻刻したものは、ごく少数にとどまる。これにはいくつか理由がある。

中国戦線の戦地を二度も経験して、幸いにも生還できた父から私が聞いた話によれば、帰国の際にはできるだけ身軽にして帰れという指示があったという。父はどこかで手に入れた麻雀盃を、家に持ち帰ろうとして荷物の中に入れてきたが、乗船時に海に捨てさせられたという。中国の本格的な盃だったので惜しかったとも言っていた。

敗戦時での帰国の際は、書類一切持ち帰り禁止となったため、それまで「整理して綴じて手元に保存してあった」銃後からの手紙は、「貴重な写真アルバムと共に残念乍ら全部焼却して」きたという証言もある（水野淳『或る出征兵士の敗戦・復員に至る記録　私が出した「軍事郵便」』（1996年９月刊）。そんな事情もあって、転戦した戦地をなんとか持ちこたえ、凱旋時、帰国時まで保持し続けた銃後からの手紙は、ほとんどが廃棄された可能性が大である。今日ま

で残されたことは、きわめて異例なことであろう。

妻からもらった15万字におよぶ軍事郵便

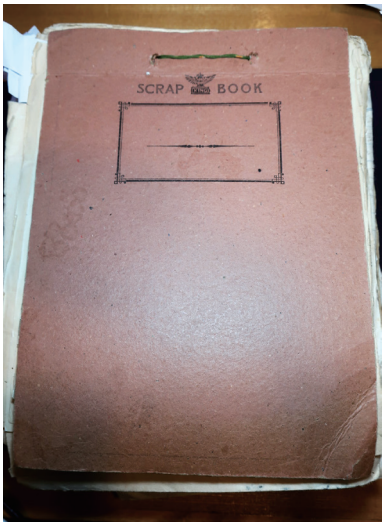

図１　「綴りの表紙」

これから紹介する軍事郵便は、厚紙の表紙は表と裏についているものの、タイトルは何もついていない綴りである。おそらく、帰国時に持ち帰った銃後からの軍事郵便を、帰国後、兵士（氏名の頭文字をとってF・Jと表示）本人がほぼ受け取った順に綴じたものだろう。兵士本人がこうして整理して綴りにすると、タイトルをつける例が多いが、F・Jは戦場で大切に保持してきた手紙を、中身だけを抜き出して閉じこんでいる。残念ながら封筒は一通もついていないので、宛名の住所も、差出人の住所も不明で、手紙の内容から推測するしかないが、長野県小県郡武石村出身（2006年に上田市に合併）の兵士であることは、推測できる。差出人はF・Jの妻および父や兄弟姉妹ら肉親から出された手紙が主なもので、ごく一部含まれている慰問文などをいれて156通である。

宛先は、正確には判明しないが、中支ではないかと推測される。時期は昭和13年（1938）６月～14年９月までで、約１年３カ月の間の書簡であるが、後半は戦闘で腹部を負傷し、本隊から離れて帰国しての入院生活となっている。彼が滞在した時期は、日中戦争のなかでも節目の戦いといわれた、武漢三鎮攻略戦の時期とまさに重なっていることから、F・Jは中支派遣軍の一人として激戦を戦ったのではないか。また、F・Jの兵士の身分は、陸軍歩兵上等兵である。

156通の手紙のうち、妻M子からの手紙は50通もあり、全体の三分の一を占めていることがわかる。１年３ヶ月の間に50通なので、１ケ月3.3通ということになり、10日に一通書いていたことになる。さらにまたこの妻の手紙一通が、これまた長文なのである。もっとも長い手紙は12枚もあり、400字原稿用紙で15枚にも及ぶ。現段階では、全文を読み解くまでには至っていないので、正確な文字数は出てこないが、平均で一枚の便せんに500字くらいの文字がびっしり書き込まれており、50通の手紙ではおよそ便せん293枚分の量となっている。そうなると500字×293枚＝146,500字という膨大な文字数となる。約15万字ともなるが、その一文字一文字には、夫を戦場におくった若き妻の思いのたけが詰まっている。よくぞ、これだけの文が書けるなと思うほど長い手紙である。そしてその文面は、すぐ目の前に夫がいるような口調で、優しくかつ愛情深く語りかけている。一度ペンを握ったら、もう離すものかとはしらせて、自分の心情をペンに托してはきだしている。いくつかの手紙から、妻M子の独特な表現に注目して、拾いだしてみた。

文面のなかには、こんな言い方が頻繁に出てくる。

「お便りがないとおちつきませんの」「いらっしゃって」「声が出てきませんの」「声が耳についていますわ」「二人を守ってくだすった」「おさっしくださいませ」

おそらくは、武石村に外から嫁いできた女性で、それも田舎とはちがう都会育ちで、それなりの家庭環境のなかで育ち、学歴もある女性なのだろう。武石村で生まれ育った地元の女性では、けして使わない表現で、地元の人と会話をすれば目立った存在だったかもしれない。夫F・Jは、こうした文面に慣れていたのだろうか。戦地で妻から、定期的ともいえる頻度で、愛情あ

ふれる長文の手紙を受け取っていたことになる。彼からの妻あての手紙が確認できないので、どんな反応を示したのかは不明だが、精神的にも大いなる影響があったのではないだろうか。戦場で自分の命と向かい合った時、妻からの手紙が頭によぎったに違いない。

一人の兵士の意識にどんな心的な影響を与えたのかを見る時、この軍事郵便の綴りから読み解いていく試論が大事になることだろう。

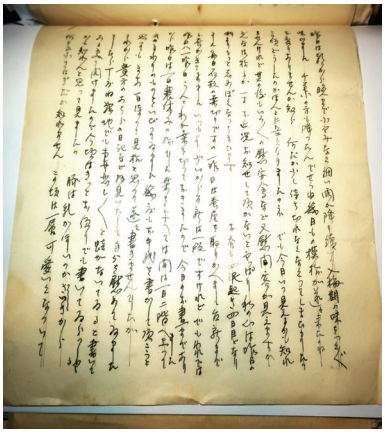

図２　「妻からの手紙の一部分」

上田市の南端で、美ヶ原のすそ野に広がる、清流と大自然に囲まれたのどかな田舎の村でF家の留守宅を守っていた妻の発する文面は、私のようにまったくの他人ではある読み手に、評する言葉を失うほどの熱量をもって迫ってくるものだった。もちろん夫婦だからこその表現なのかもしれないが、それにしても生死を分けるような場に身をさらし続けている兵士が、こんな手紙を頻繁に受け取ったら、どんな心情になるのだろうか（**図２**　妻からの手紙の一部分）。

私の全部であり、“オアシス”だった軍事郵便

ここで、50通の中から、いくつかの手紙の一文を紹介してみたい。前後の文を省略してあるので、どんな場面で表現されているのかはわかりづらいかもしれないが、M子の愛情たっぷりの手紙を実感してみたい。紹介する文に、簡単なタイトルを付してみた。

１　「待ちに待った」便りに「止めどない泪」

集配人の気配、私がいつもの様に飛び出しましたら、見覚のある待ちに待ったあなたのお便り、止め度ない泪をやっと拭き止め、宅からよせ、誰もが一度に「早く読んで」の声、開封もまどろしく、一息に拝読が、感激が胸にせまって声がでませんの。人には涙をみせぬことに決心した私には、かなり苦しいのでした。読み終りました時ハ、誰も声するものなく、みんな涙にくれて居りました。あんまりの筆にもつくせない御苦戦、御苦難に、炬燵になど居て、お便り拝読するのが、申訳なくってたまりません。こうして居られるのも、みんなみんな貴方の鎬（しのぎ）をけずる粉骨砕身のおかげと思ひば、御礼の言葉も存せず、たゞたゞ有難、涙にむせぶのみですの。百日間も一日も休みなく、お米一合とお聞して、又山又山に露営し、川又川湖、よく新聞になど、そんな写真が出まして、この中にあなたがと、よく見たもんでしたが、きっと居らっしゃったかも知れませんね。

→軍事郵便は宛先人だけが読むのではなく、銃後の人々にとっては共通の手紙と受け止めていたことがわかる。「待ちに待った」手紙は、戦場での苦戦苦難と銃後の生活との比較となり、兵士への感謝と兵士への申し訳なさ、自然とでてくる涙へとつながる。

２　「ひまさへあれば」二階で読む

毎日夜、ひまさへあれば、二階へ上ってお便りを拝見して、どんな処で、どんな風に、このお便り、お書き下すったか知ら。毎日どんな御生活を遊していらっしゃるか知らなど、色々と何から何まで案じて見たり、又どんなにお元気が回復していらっしゃって、お返事着く頃は、もう本隊へお帰りになっていらっしゃるかなど、想像にも及はぬのに、想って居りますのヨ。

→一通の軍事郵便を、人目を避けて何度も何度も読み直し、この行為が一層、夫への思いが

強まったのではないか。

3　再三手紙をだしたことへの「自責の念」

お書面によれば、大変の御苦戦遊れ、私のお便り待つ身の申訳なさ。又恥くさへ思はれ、あんなお便りを幾度も幾度も差上げたことが、ほんとに何とも云はれぬ自責の念にたへられませんの。

→現地での苦戦と、ただ手紙を待つ自分とを比較し、恥しさと自責の念に苦悩している妻M子の姿が見える

4　「除夜の鐘」と「貴方のみ姿」

除夜の鐘も一つ一つが身にしみて、其の夜は一睡も出来ませんでした。そして思ひ出もなつかしく、自分の立場がはっきり光り出し、力強く一歩一歩踏みしめて行かれる様な力強さを感じました。

前のお宮の森に入れば、高い木の間から星がまたゝいて、さながら私達を静に守って下さる様に見え、神のみ前にぬかずけば、貴方のみ姿が目にうつり、どうぞ神様、私達の願ひを聞いて下さいと、おのずから涙がほゝをぬらします。

→「除夜の鐘」の音が、銃後を守る立場を一層明確にしたという表現に、M子の高い認識がよみとれる。

5　「私のために生き」て、愛の前には恐れるものなし

貴方がいつもいつも私に思って下さる愛情のあたゝかいうれしさで、体がふるへました。感謝感謝と幸福の涙が!!。泣くないゝか!!!。って御出発の時、云ひつけられましたっけネ。其の声が耳についていますワ。でもこの涙はちがふのよ。だからゆるして下さいネ。

（中略）貴方が一生懸命でどんな苦しみをも負して、私の為に生きて下すったことは、ほんとうに御神仏のおかげを二人を守って下すったんですは、深々感じます。そして今更の様に愛ほど強く、其の前には何ものも恐るものはない。あなたのお苦しみになったあの場面は、二人の脳裏にふかくふかく生涯忘れることなく、刻まみ込まれています。貴方の応召された時、又負傷の報に接した刹那の悲しみを通り越した悲痛な一筋の白々光った明りを嬉んでふむ覚悟の出来ましたのも、ほんとに愛そのものの全部でありますのね。今まで過去にあった平和を忘れられずが、色々の苦しみが当然のことと思って、安らかな心境を得られる様につとめましたが、矢張り凡人で達観した悟りは仲々開けず、貴方にも絶へず、どんなことをも苦しめたことを、今更良心に責められますの。私ははじめて本当の人の世を少しは知った一年生として、今までのものを基にして、出なほしませう。あなたも生活の基準に私を入れて導いて下さいますものね。何もかもみんなネ。だから私もお便りないとおちつけませんの。

→「私の為に生きて下さった」との表現にまず、驚く。さらに二人を結ぶ愛は強く、「何ものも恐るものはない」と言い切っている。戦場と銃後をこれほど結びつける言葉はないのではないか。そして「私ははじめて本当の人の世を」知ったという表現がでてくる。二人の間の手紙は、夫婦それぞれに新しい発見と創造を生み出しているのではないか。

6　「待ちあぐんでいますの」

もう毎日お便りあったかしらと、午前も午后も、畑からかへると台所から茶の間まで、一生懸命に見まわしますの。何だかはるか振りの様な気がしますのネ。でもプンプンしてゐるんぢあないんですのよ。唯待ちあぐんで居ますの。静かにネ。

→「待ちあぐんで」いる様子が、リアルに伝わってくる。

7　あなたの便りは「私の全部」・「一生忘れられぬオアシス」

次から次へと伸びゆく双葉を見る時は、何も忘れて愛しく思ひますし、又何よりの私の喜び

の一時でありますの。でも貴方のお便りの方がもっともっとなんですの。それこそ私の全部なんですもの。一生忘れられぬオアシスなんです。

→便りが「私の全部」であり、「一生忘れられぬオアシス」だと、妻は記した。受けとった夫はどのような感情をもったのであろうか。

8　あなたの日記と「妻恋し蛙」

幾度もお手紙を書かして頂こうと思っても、まあ、一日待って見様と思って、遂々書きませんでしたが、それから貴方のあちらの日記など拝見いたして自分を慰めてゐました。そしたら丁度ね。戦地でも妻恋し妻恋し蛙がないていらっしゃるかもしれんと思って見ましたの。

→自分を慰めるために、夫の日記を妻が読んでいる。この光景から「妻恋し」と鳴く蛙が浮かび上がってきたところが、何とも言えない感情だろう。

9　二人にしかわからないあなたの便りと「いゝ妻」

何よりも嬉しいことは、やっぱり貴方のお便り、ほんとに其の心は誰もわかりません。

二人きりより外には。（中略）いよいよ近くなって来ましたのネ。新しい二人の生活が!!!。

うんと今から心の様意をして、自分達の道を第一歩からと云ふ様な、張り切った嬉しい気持になりますのね。

貴方を一番幸福の空気の中に、安心と嬉びを持って頂ける様な、いゝ妻にあゝもこおもと、三年前のことやら、色々考へています。

→凱旋が間近になった時点での手紙。夫婦二人にしかわからないという表現に、すべてがあらわれている。

10 「感謝の涙の沈黙」と「寝ても覚めても私の全部」

貴方の御出征なされた日が又近くなりました。思ひ出多い今日この頃の私の気持、おさっし下さいませ。

ほんとに長い様な短い様な、美しい過去、否!!!。苦しみもかなしみも、みんな全部が過去は美化されましたのね。丸々二年間、あなたの今日までのことを思ふ時!!!。一日一日のこと、何て御話申上げていゝのやら。心から有がたい、有が度い、感謝の涙の沈黙があるのみですわ。あなたの御心をこゝから暖い心を、手をさしのべてあたゝめて上げます。ほんとに身近く思って下さいね。だんだん御元気が増すばかりの毎日でせうね。でも時節のかわり目ですから、ほんとにおん気をつけて下さい。（中略）ほんとに心配性の私を可哀想に思って下さい。あなたのことばかり、ねても覚めても、私の全部ですの。笑はないで下さい、ばかなんて。

→２年間におよぶ軍隊生活が終わり、それも後半は負傷し、入院生活を余儀なくされたF.Jがいよいよ家に帰って来ることに対しての、妻M子の思いのたけがつまった手紙である。「感謝の涙の沈黙」と「寝ても覚めても私の全部」の表現が象徴している。

ドイツの「ふつう兵」への問いは、日本兵にも活かされるか

ドイツの兵士の軍事郵便を先駆的に研究して貴重な成果を出され、そのたびに私も大いに刺激を受けている小野寺拓也氏が、2012年に出した『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」――第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』（山川歴史モノグラフ26）と同名の本を、昨年末に今度は一般書「山川セレクション」として刊行された。この本の序文に、2022年度から高校に導入された「歴史総合」に触れ、2023年度からは「日本史探求」「世界史探求」が開始され、「史料を用いて自ら問いを立てていく」歴史学習が、これからは「一般的になっていく」のではないかと指摘されている。当然、大学の歴史教育にも影響を及ぼすだろ

うとも言っている。そこで、高校や大学教員が「問い」とともに「提示できる史料を提供したい」と、「ふつうのドイツ兵」の軍事郵便を分析されながら、それぞれの章「全体の問い」と「内容確認のための問い」を設定し、理解しやすいようにされた。小野寺氏が最終的に問うているのは、「イデオロギーと「主体性」」であり、今度の本もその究極的な問いにこたえようと、いわゆる「ふつうのドイツ兵」の出した軍事郵便に長い間真摯に向きあって、出された結論でもある。小野寺氏が把握されていることによると、第二次世界大戦で、ドイツ兵は約1800万人動員され、約300～400億通の野戦郵便がやりとりされたとしている。そのうちの約四分の一が兵士からの手紙だというので、100億通くらいということだろう。現在ドイツの文書館などで確認されている野戦郵便の数は、30万通弱と推定されていて、小野寺氏の研究は、その30万通のうち、5,477通に依拠した史料群が元になっているという。

これらの史料の「代表性」については、限られた史料の数、集め方にかかるバイアス、史料選択での研究者のバイアスなどから、兵士全体の傾向を代表するとは「決してできない」と断ったうえで、小野寺氏は、史料選択の明確さ、厳密な史料批判、分析プロセスの透明性の確保と、さらに「安易な一般化を避ける」という研究姿勢を明確にしての研究の意味は充分にあると認識している。とても示唆に富んだ指摘だと思う。

日本において、「ふつうの兵士」の手紙に触れてきた私にとっても、この指摘と手法はとても刺激的で、大いに学ぶものがある。私自身、まだその整理ができていないが、小野寺氏が立てた「問い」の中には、日本の軍事郵便の読み解き方にも重なるものがあると、私は実感している。日本兵の戦場での意識や銃後とのかかわりを探り出そうとするためには、果たしてどんな問いを立てればいいのだろうか。小野寺方法論に学んでみたいと思っている。

現地の人々や銃後の人々との関係性に注目してとりだしてみると、小野寺氏は、こんな「問い」を投げかけているのである。

1　戦争によって足を踏み入れることになった土地や文化に対する兵士たちの眼差しは、どのようなものであったろうか？
2　「家族や故郷を守るために戦わざるを得ない」という考え方は、どの程度兵士たちの間に広がっていたと言えるだろうか。
3　自分たち自身が勇敢でなければならない、耐え抜かなければならないと兵士たちが書くときと、故郷にいる女性に対して勇敢さを求める場合とでは、どの点が異なっていただろうか？
4　家族が空襲を受けるという間接的な暴力経験が、戦場での暴力経験と同じような影響を兵士たちにもたらしたのはなぜだろうか？

日本のごくごく一般的な兵士の軍事郵便について研究をすすめている私にとっても、兵士が交わした戦地と銃後の間の手紙の分析に、小野寺方式に学びながら、日本兵独自の「問い」を模索しながら、新たな研究に取り組みたいと考えている。

（あらい　かつひろ　専修大学文学部元教授）